

# 《マンガ嫌韓流》におけるマンガ表現の技法とその限界

——作品の「読み」の側面に着目して——

福 本 拓

## 論文要旨

本稿の目的は、《マンガ嫌韓流》におけるマンガ表現の技法に焦点を当てて、図像表象と言説のそれぞれの位相における集団間の境界設定の様相を検討し、読者の「読み」の観点から考察することにある。図像表象に関しては、①韓国人・在日朝鮮人が頬骨の突出という同質かつ不変の生物学的差異を有する者として描写されるとともに、②読者に「恐怖」を感じさせ、むしろマイノリティとしての「読み」を成立させる作品中の構図が、自己と読者と他者＝韓国人・在日朝鮮人の境界を設定する「舞台装置」として機能していることが明らかになった。一方、言説の位相では、差異化の力点が個人に置かれているが、同時に、図像表象と同様に在日朝鮮人と日本人との間に解消不可能な差異があることも暗示されている。また作品中の言説は、日本人内部の「差別なるもの」を讀者＝主人公＝作者の関係から外部化する機能も担っている。ただし、その機能は不完全なものになってしまっていることから、《マンガ嫌韓流》はストーリー外のメタメッセージに依拠せざるをえなくなる。その結果、成立させたはずの讀者＝主人公＝作者の関係が脅かされることになり、この点で同作品におけるマンガ表現の手法には限界が内在しているといえる。

## I はじめに

(一) 「嫌韓ムーヴメント」の隆盛と《マンガ嫌韓流》

(二) 本稿の視点

## II 図像表象が「読み」に果たす機能

(一) 人物の表象における生物学的差異の強調

(二) 図像表象を通じた「読み」の方向付け

III 言説における境界の設定と図像表象との関係性

IV 《マンガ嫌韓流》の限界―「嫌韓のための嫌韓」の差異化をめぐる

V 結び―《マンガ嫌韓流》に対する批判の射程

## I はじめに

### (一) 「嫌韓ムーヴメント」の隆盛と《マンガ嫌韓流》

近年、情報化社会の進展とともに、インターネット上における特定の個人・集団への誹謗中傷、とりわけ女性・同性愛者・外国人など、マイノリティと呼ばれる人々への攻撃的な言説の蔓延が問題となっている。こうした言説は、仮想空間でのコミュニケーションを成立させる単なる共通コードとみなされる傾向もあるが、しかしここ数年、さまざまなメディアを通じて現実世界へとあふれ出し、既存の差別意識を強化・覚醒する状況も生じている。従って、情報化社会における人権のあり様をめぐる問いは、現実にも生じているマイノリティへの排撃を理解する上でも、分析の必要性が高まっているといえよう。

いわゆる「嫌韓ムーヴメント」は、こうした状況が民族的マイノリティ、特に在日朝鮮人に現れた典型的な一例として挙げられる。そこでの主張の中心は、もちろん過去の植民地支配の賛美・肯定にあるといえるが、攻撃対象は韓国ないし朝鮮半島の歴史・文化・社会・政治など幅広い事象にまで及ぶ。例えば、韓国の政策に関しては、過去の植民地支配に由来する日本への批判をめぐって、既に決着済みである問題（一九六五年の日韓基本条約が論拠とされる）と反論し、国民に対する「反日」教育こそが日韓の対立を深刻化させ、内政干渉を引き起こしていると非難される。そして、文化・社会についても、日本文化を剽窃する韓国に固有の文化は存在しないという中傷や、韓国の国民性を感情的になりやすいものとして揶揄したり、韓国社会そのものに「反日」的な要素が内在するといった主張が展開される。また、在日朝鮮人に対しては、権利ばかり要求して日本人を攻撃するばかりか、彼らこそがある種の特権を享受していると論駁し、彼らの利得のために活動している人々（日本人やマスメディアも含む）が中傷・揶揄の対象となる。

これらの主張で構成される「嫌韓ムーヴメント」は、もともとはインターネットの掲示板やブログを中心に広まったものであるが、山野車輪作『マンガ嫌韓流』（晋遊社）の発売（二〇〇五年七月）をきっかけに、関連本の出版や雑誌での特集が相次ぐなど、現実世界において一種の社会現象と呼べる状態が生じた。その後、二〇〇六年一月には、同書や関連本の著者らが発起人となり、「在日特権の根幹である人管特例法を廃止し、在日をほかの外国人と平等に扱うことを目指す」ことを掲げた「在日特権を許さない市民の会（在特会）」<sup>1</sup>が設立されるに至っている。本稿で取り上げる『マンガ嫌韓流』シリーズ（『マンガ嫌韓流』にはじまり、二〇〇六年二月刊行の『マンガ嫌韓流2』、二〇〇七年十月刊行の『マンガ嫌韓流3』<sup>2</sup>まで）は、『マンガ嫌韓流3』の発売時点で累計七八万部を売り上げたほか、関連書籍の販売を牽引しているなど、「嫌韓ムーヴメント」が仮想空間から現実世界へと浸透する過程で橋渡しのな役割を担っている。<sup>3</sup>この点で、『マンガ嫌韓流』は「嫌韓ムーヴメント」の中心的・象徴的な存在になっているといえる。

それゆえ、「嫌韓ムーヴメント」に対する批判は、主に《マンガ嫌韓流》を対象として蓄積されてきた。既に、朴・太田<sup>4</sup>、田中・板垣<sup>5</sup>、雑誌『前夜』<sup>6</sup>の特集などによって多くの議論が提起されているが、それらはおおよそ以下の三つに類型化できよう。

第一に、『マンガ嫌韓流』における歴史的事実の誤認や解釈の誤り、歴史認識に関する指摘がある。『嫌韓流1』での日清戦争の記述に見られる明確な誤りのほか、強制連行・従軍慰安婦、植民地支配の実態、さらには日韓基本条約における補償問題に関する議論などがここに含まれよう。第二の類型としては、主に韓国人・在日朝鮮人への中傷・偏見や、彼らをめぐる政治に関わるものが挙げられる。《マンガ嫌韓流》では、地方参政権付与をはじめとする権利擁護運動への反対、彼らの犯罪性の強調、「在日特権」<sup>7</sup>の糾弾などが展開されるが、こうしたトピックへの反論も《マンガ嫌韓流》に対する批判の一つの骨子を成している。そして、第三に、『マンガ嫌韓流』におけるマンガ表現に着目した議論がある。キヤラクターの表象に込められた作者の意図の解説や、そうした表象を受容する側に関する社会学的な分析などを含めることができよう。

第一・第二の類型で焦点が当てられているトピックスは、板垣<sup>8</sup>などが指摘するように、「嫌韓ムーヴメント」が顕在化する以前より、植民地支配の肯定論・賛美論や「在日朝鮮人は義務を果たさず権利ばかり要求する」といった形の主張として繰り返されてきたものである。もちろん、『マンガ嫌韓流』で展開される主張の是非に関する議論は、「嫌韓ムーヴメント」への対抗を考える上で不可欠である。とはいえ、仮に同作品がマンガでありながらも目的からして「政治的な次元を超えるものにはなり得ない」としても、そのメディアとしての特徴が「嫌韓ムーヴメント」の顕在化に果たした役割も看過できない。言い換えれば、「嫌韓ムーヴメント」の現代的な特徴を把握する上では、同作品の主張をメディアの性

質という側面に沿って検討する必要もあろう。第三の類型に分類される議論は、《マンガ嫌韓流》の受容をマンガというメディアの「わかりやすさ」に還元することなく、同作品を通じた主張の伝達―受容の構造を総体として捉え、「嫌韓ムーヴメント」の本質を解き明かすという点で意義の大きいものと考えられる。

そこで本稿の目的として、《マンガ嫌韓流》の主にマンガ表現上の特徴に焦点を当て、《マンガ嫌韓流》および「嫌韓ムーヴメント」の意義の一端を解明することに設定する。分析にあたっては、同作品の表現そのものに加え、従来論じられることの少なかった、表現における「読み」の契機に着目したい。次章で詳述するように、《マンガ嫌韓流》に対する既存の批判では、マンガ表現の果たす役割に関して、作者の主張の正当化という文脈で論じられてきた。その一方で、作者―読者の関係に果たすマンガの介在の仕方に関する分析が不足している点も指摘できる。本稿での取り組みは、《マンガ嫌韓流》を媒介とした作者の意図と読者の受容を総体として捉え、「嫌韓ムーヴメント」の輪郭をより明確にするようになる。

## (二) 本稿の視点

《マンガ嫌韓流》の表現に関する批判は、主に登場人物（特に韓国人や在日朝鮮人）に見られるステレオタイプのな凶像表象に集中している。例えば中西<sup>10</sup>は、作品中に登場する在日朝鮮人が、顔の特徴の強調や「火病」<sup>11</sup>の発現といった形で人種主義的に表象されていること、および、在日朝鮮人側に立った主張をする日本人（作品中では「プロ市民」<sup>12</sup>なし「左翼知識人」として一括されることが多い）が醜悪に描かれていることを指摘し、作品中のフィクションがリアリティを持って受容される際に、こうしたキャラクターの印象操作が重要な役割を果たしていると述べている。また板垣<sup>13</sup>は、韓国人および在日朝鮮人の人種主義的な表象が、必然的に人種化された「日本人」像の構築（＝「国民主義」）を意図し、「『一部（の朝鮮人）が悪い』としながら、朝鮮人全体を評価・監視していくようなまなざし」<sup>14</sup>が存在していることを指摘し、これらが主張の正当化や作品の受容に大きな役割を果たしていると述べている。さらに、《マンガ嫌韓流》を受容する側について、仮定の論敵の設定と論駁という同作品のストーリー構成が、不安を抱えた読者にある種の開放感をもたらすことを論じている。

これらの論考は、「嫌韓ムーヴメント」に内在する人種主義的側面を露出させ、マンガを介在した受容の構造に迫っている点で、一定の評価をしえよう。しかしその一方で、既存の議論には以下に挙げる三つの問題があることも指摘できる。第一に、《マンガ嫌韓流》におけるステレオタ

イブ的な表象やストーリー展開を問題化する際に、「日本人」対「韓国人」ないし「在日朝鮮人」という二項対立的な図式が強調され過ぎている  
 さらがある。仮に、同作品が両者の差異を徹底的に強調することを念頭に創作されているとしても、後述するように、登場キャラクターの属  
 性や主張を一次元の対立図式に還元できない部分もある。

第二に、マンガ表現に焦点を当てつつも、マンガというメディアの特質が十分に踏まえられているとはいえない印象がある。つまり、マンガ  
 のメディアとしての特性の一つが、図像と文字（台詞などの言説）の双方が用いられ、両者の有機的な関係がマンガ作品全体としてのメッセー  
 ジ性を具有させる点にあるとすると、中西や板垣の論考では、これら二つの位相が未分化なまま論じられており、それぞれがどのような機能を  
 担っているかに関する分析が不足している。

第三に、マンガ表現に込められた作者の意図を分析する際、読者の存在が捨象されていることも問題として挙げられる。というのも、マンガ  
 のキャラクター表現や構図は、マンガ作品に対する読者の視点、つまり、あくまでも外部者として作品中のストーリーを眺める立場なのか、あ  
 るいは、作品中のキャラクターの視線と同一化するのかを決定付ける側面があるからである。<sup>15</sup> 言い換えれば、読者は建前上は自由な「読み」を  
 実践できるとしても、実際には、作者―マンガ作品―読者という関係において、作者は読者を特定の「読み」に誘導する点で大きな役割を果た  
 す。従って、《マンガ嫌韓流》の受容を考える上では、作者が読者の受容に介入する様相について捉えることも必要だと思われる。

第一・第二の問題点は、マンガ表現を一面的に捉えていることに起因しているといえるが、それらに対し第三の点は、《マンガ嫌韓流》をめぐ  
 る本質的な議論、すなわち、同作品が「差別」であるか否かという問いを考察する上で極めて重要性が高い。《マンガ嫌韓流》が差別である  
 という批判に対し、作者は同作品が差別には該当せず、キャラクターの描き分けはマンガ表現上の技法の一つに過ぎないと反論している。もち  
 ろん、《マンガ嫌韓流》は「差別」「人権」といった概念の意味内容を再構成することにも主眼があり、「差別」の内容が批判する側と異なるこ  
 とも検討されなければならない。しかし、作者―読者を媒介するマンガ表現に着目した分析の意義は、いかにして作者が《マンガ嫌韓流》を差  
 別でないものとして、読者に了解させるのかという点にもあるのではないだろうか。

そこで本稿では、《マンガ嫌韓流》の表現について、特に集団間の境界設定に焦点を当て、その含意を分析・考察することに組みたい。そ  
 の際、既存のマンガ表現に関する議論を踏まえ、本稿では以下の諸要素を具体的な検討対象とする。一般に、マンガ表現論において、マンガの  
 構成要素は図像（線で成り立つ人物や吹き出しの形、動きや感情を表す記号、擬態語<sup>オノマトペ</sup>など）、コマ（枠線による分割の形態）、ことば（台詞）の

三つとされる<sup>16)</sup>。本稿では、このうちコマを除く画像とことば（言説）に焦点を当てる。確かに、マンガ作品中の時間的変遷を司るコマ構造を分析から捨象することに問題がないとはいえない。しかし、本稿の主眼は同作品を貫く不変的な境界設定の手法にあることから、コマ構造を分析から除外することに致命的な問題は生じないと考える。また、同様の理由から、本稿では画像の中でも人物に関わる部分のみを取り上げることとしたい。マンガ表現論の枠組みでは不十分な分析とならざるをえないものの、《マンガ嫌韓流》の有する政治性や既存研究における問題点に照らすと、本稿での議論は一定の有効性を持ちうると思われる。

## Ⅱ 画像表象が「読み」に果たす機能

### （一）人物の表象における生物学的差異の強調

先述したように、マンガの画像表象に類型化されるものは多数あるが、本稿の主眼が境界設定の手法と読者の「読み」にあることに鑑み、本章では作品中の画像表象の中でも人物の表象と構図の二点に焦点を当てる。その際、何らかの個人的背景が明確でストーリー展開とも密接に関わるキャラクター以外にも、モブ（群衆）といった形で登場する人物（その多くが、韓国人・在日朝鮮人・日本人であることを除き、明確な属性を持たない）も検討対象に含める<sup>17)</sup>。

《マンガ嫌韓流》における画像表象の中でも、登場キャラクターの描き分けが人種主義（人種差別主義、レイシズム）に該当するという批判は、『嫌韓流1』の発売直後から見られた。メンミによれば、人種主義には、①純粋な人種が存在し、各集団間および集団を構成する個人間に重要な生物学的差異が存在する、②純血種は生物学的に他の人種に優越し、このことは心理的・社会的・文化的・精神的優越性として表現される、③前二者で示される優越性は、優越集団の支配と特権を説明し正当化する、という三つの系列の論理が存在している。そして、人種主義が「差別」として問題になるのは③の段階であり、①②については差異の確認の問題に過ぎないと述べている。言い換えれば、「差別」に該当するかどうかを問わずとも、《マンガ嫌韓流》が人種主義の①ないし②の側面を有するかどうかを検討することは可能だといえよう<sup>18)</sup>。

《マンガ嫌韓流》の人物の表象に関して、特に生物学的差異を強調したものと見えるのが、頬骨の描写である。韓国人という設定で登場する人物についてみると、何らかの役名を与えられたキャラクターのみならず（例えば図1）、ほぼ全てのモブ（群衆）シーンにおいても（図2が典型



図1 『嫌韓流 1』 202頁



図2 『嫌韓流 1』 83頁



図3 『嫌韓流 2』 230頁



図4 『嫌韓流 1』 93頁

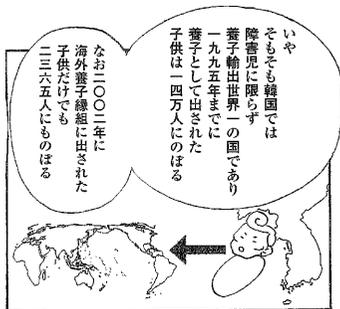


図5 『嫌韓流 2』 176頁

的)、頬骨を突出して描くことが作品中を通して徹底されている。唯一、初出シーンではこの特徴が描かれていない「朴然守」(『嫌韓流2』)および『嫌韓流3』のデイベートの場面で、韓国人側のリーダーとして登場する)についても、デイベート中に感情的になるシーンで頬骨の突出が描かれている(図3)。ただし、顔の特徴の誇張に関してより重要なのは、こうした特徴が生来不変のものであることを示唆する箇所である。図4の例では、頬骨の突出が骨格レベルに由来することが示されており、また、図5は、こうした特徴が生まれながらに備わっていることを窺わせる。頬骨の突出は、韓国人が例外なく具備している身体形質上の特徴であり、かつ、遺伝的に受け継がれるものとして描かれているといえるよう。

以上に述べた生物学的差異の表象は、海外の韓国人ないし韓国系と思しき人間や、在日朝鮮人キャラクターについても同様に当てはまる。在日朝鮮人キャラクターは、後述するように、作品中で固定化された役割が与えられているわけではないが、はじめは主人公らと敵対する意見を主張する「松本光一」だけでなく(図6)、帰化した「元在日」であり、『嫌韓流1』から主人公側の意見に同調する「金田安広」(図7)、『嫌韓流2』で松本と意見を対立させる「安田英春」(図8)の描き方も、頬骨の強調という点では共通しており、モブのシーンも含め、この表象を免れている在日朝鮮人キャラクターは首尾一貫して登場しないことがいえる。さらに注目すべきは、この生物学的差異の強調は、時間的に不変のものとして受け継がれていくことを示唆する箇所である。典型的なものは、図9の事例で、未来的な服装をまとった「在日100世」でも、頬骨が突出していることを窺わせている。

以上から、少なくとも《マンガ嫌韓流》における人物表象が、メンミが言う人種主義を構成する論理系列の①に該当することは疑いないといえよう。そしてこのことは、文字の位相との関係から捉えた場合、読者のマンガの「読み」にも大きく影響を及ぼすと考えられる。図10の例で考えてみよう。このコマを前後のストーリーから切り離して考えてみると、「日本人だっているのか」という台詞が、日本人ではない、主体から発せられたと言える根拠は、(コマ外の主人公による解説を除くと)顔の特徴、すなわち頬骨の強調以外に見出すことはできない。あるいは、作品中の登場人物の属性は、台詞を中心とする文字の意味内容からはある意味で独立して解釈しうる部分があると言い換えられる。従って、《マンガ嫌韓流》における頬骨の強調という生物学的差異は、人物ないしキャラクターから発せられる言説の如何にかかわらず、読者が特定の集団を識別するために共有するコードとして機能しているといえる。

## (二) 図像表象を通じた「読み」の方向付け

前章で述べたように、図像表象は、キャラクター・人物の描き分けだけでなく、読者と作品中のキャラクターの位置関係を規定する上で重要な役割を果たしている。対立軸を作り出しつつ主張を呈示する場面が多い(ディベートはその典型)という《マンガ嫌韓流》の特徴をふまえると、キャラクターとの関係形成は、読者がどの立場からその主張を受容するかを理解する上で極めて重要なトピックである。本節の議論は、図像表象における「読み」の方向付けに関わるものである。



図6 『嫌韓流1』73頁



図7 『嫌韓流2』14頁



図8 『嫌韓流2』63頁



図9 『嫌韓流3』62頁



図10 『嫌韓流3』177頁



図11 『嫌韓流 1』 66頁



図12 『嫌韓流 1』 212頁



図13 『嫌韓流 1』 66頁

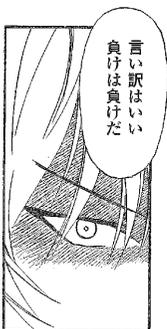


図14 『嫌韓流 2』 204頁

《マンガ嫌韓流》でこの方向付けがどのように機能しているかを捉える上で、おそらく最もわかりやすい例がデイベートの場面における構図である。図11を見てほしい。この構図からは、読み手が手前の「末行隆平」（主人公らが所属するサークルの代表）と同じ側におり、「プロ市民」の面々および「松本光一」の視線にさらされていることがわかる。同様の事例は同作品中に多数見受けられるのだが、しかし読者と主人公を同一化させる描き方は、一般的なマンガ作品でも用いられる手法であり、表現上問題であるとはいえない。むしろ注目したいのは、《マンガ嫌韓流》には、読者にある種の「恐怖」を喚起する構図が内在している点である。

例えば、デイベートの場面はとりわけ典型的だが、感情を剥き出しにしたキャラクターが読者を睨み付ける構図が読み取れる。図12の韓国人キャラクターの事例に加え、「プロ市民」のような意見の対立する相手についても、読者側に向けられた視線を確認できる（図13）。ほかにも、目許付近にズームインしたコマでは、図14がわかりやすい。この視線は、ストーリーとの関係でいえば韓国人である「朴然守」が「松本光一」に向けたものであるが、同時に、読者に対しても向けられている<sup>19)</sup>。さらに、作品中の多くのモブ（群衆）の描写においても、同様の視線の向きが看取できる。

視線の問題とあわせて興味深いのは、特にモブの場面で配置される在日朝鮮人と日本人の人数の違いである。例えば図15のように、無名の在日朝鮮人（頬骨の強調からそれであることがわかる）と日本人が対峙している場面で、在日朝鮮人側は常に日本人側よりも人数が多く描かれて

いる。あるいは図16では、要求を通そうとする在日朝鮮人二人に対し、それを受ける側の日本人（と思しき）キャラクターは一人しかいない。すなわち、読者が日本人であって何らかの要求をされる側に同一化しているとすれば、一人ないし少数で多数を迎え撃つという図式を受け入れることになる。いわば、マジョリテイーマイノリテイ関係の転倒が起きているといえる。

実は、《マンガ嫌韓流》の「舞台装置」として機能しているこれら二つの側面―「恐怖」と「マイノリテイとしての読者」―は、現象学的な観点から見た自己―他者関係と差別の発生という文脈に置いてみると、より深く理解できる可能性があるのではないか。

郭によれば、差別の現象学的レベルでの動機は、《根源的社会不安》にあるという。言い換えれば、自己は（哲学的な意味での）世界の現実性を他者との（暫定的な）関係を通じて知りうるが、その他者はまた別の他者と自己の関知しえないところで関係を結び結ぶ。自己は、この関知しえないこと―郭が言うところの他者の《超越》―を、「他者は、別のところからやってきたし、同時にまた、別の他者のところへ行きうる存在<sup>(21)</sup>」として理解する。言い換えれば、自己の現実性が唯一絶対のものであるという幻想は、他者の《超越》によって脅かされる。差別が発生する契機は、この「自らが不意打ちされ、世界を剥奪されるかもしれないという《根源的社会不安》<sup>(22)</sup>」を解消しようとする試みにある。彼によれば、試みの具体的な内容とは、自己が世界の正当な一員であることを示すために、何らかの差異に基づいて他者を世界の外部に位置付けるとともに、その世界内にいる「我々」を構築することであるという。

このことは、人種主義の前提となる異質性嫌悪<sup>セノフォビア<sup>(23)</sup></sup>の図式化ともいえるが、それはともかく、《マンガ嫌韓流》における二つの「舞台装置」は、郭が示した図式にかなりの程度当てはまっているように思われる。まず、本稿で言うところのキャラクターの視線から看取される「恐怖」は、現象学的な差別の発生過程における「不安」と同種のものと考えてよいだろう。次に、「マイノリテイ」としての自己（＝読者）の表象は、他者（＝韓国人ないし在日朝鮮人）の間で取り結ばれる関係性に関知しえないこと、すなわち、自己の世界が暫定的なものにすぎないことを読者に伝えていると解釈しうる。そして、より興味深いのは図17の例で、ここでは黒塗りのシルエットで描写された在



図15 『嫌韓流 3』 258頁



図16 『嫌韓流 3』 160頁

日朝鮮人に対し、それに怯える（おそらく日本人の）キャラクターが描かれている。重要なのはキャラクターの表情ではなく、シルエットで描かれた在日朝鮮人が、いわば入れ替え可能な他者であることを示唆している点である。まさに、他者がどこからかやって来て、また別のどこへ行きうる存在として描写されていることが窺えよう。その一方で、日本人側のキャラクターは個々に描き分けられていることにも注意せねばならない。というのも、例えば図17において手前左側から三人目の男性が魚屋か八百屋であることがわかるように、自己∥読者が有する既知のコードによってその存在が理解されうる可能性が高いからである。つまり、手前側のキャラクターが自己の世界の一員であることが描写されているといえる。<sup>24)</sup>

さらに付言すべきは、同様の描写が《マンガ嫌韓流》中の「左翼勢力」に対しても行われている点である（図18）。作品中を通じて、「左翼勢力」には韓国人ないし在日朝鮮人の側に立った意見を表明する立場が与えられているが、彼らも自己∥読者が関知しえない対象として描かれていることには、そうした意見を有する日本人をも他者化する意図が反映されているといえる。この場合は、「舞台装置」が意見の封じ込めという機能も担っており、読者が主人公側に同一化することに寄与している。

以上から、《マンガ嫌韓流》の「舞台装置」としての画像表象は、読者の「読み」の方向付けという点からいえば、極めて巧緻に構成されている。つまり視線やマジョリティー・マイノリティー関係の転倒という描写は、自己∥読者が韓国人・在日朝鮮人・「左翼勢力」（「プロ市民」を含む）を〈超越〉する他者として受容しやすくするために、同作品中に織り込まれているのである。

そして、同時に、画像表象を通じた

読者—主人公らキャラクターの同一化には、作者というもう一つの主体が組み込まれていることに注意したい。《マンガ嫌韓流》では、主人公らと会話を交わすキャラクターとしての作者がたびたび登場する。図19のような構図では、作者と会話しているのは主人



図17 『嫌韓流3』159頁

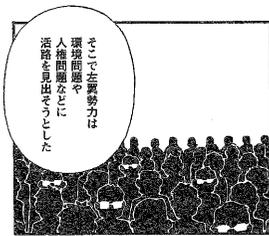


図18 『嫌韓流3』73頁



図19 『嫌韓流1』284頁  
注) 一番右が作者。

公であるが、後者に読者が同一化しているとすれば、作者—主人公—読者という関係が成立している。ある意味では、ここが同作品における最も特徴的な部分といえるかもしれない。というのも、小林よしのり作の『ゴーマニズム宣言』シリーズを《マンガ嫌韓流》と比較するとよくわかるが、前者ではキャラクターとしての作者が読者に真正面から対峙して語りかけるといふ構図なのに対し、後者では、読者・作者・主人公らが語る側—語られる側という役割が固定されない水平的な関係を築いているからである。

### Ⅲ 言説における境界の設定と画像表象との関係性

前章で述べたように、《マンガ嫌韓流》の画像表象は、それ自身が差別かどうかはさておき、差別の—特に人種主義的な—契機を含んでいる。しかし、同作品が差別を企図しておらず、その目的が「日本と韓国の友好のために理性をもって話し合うこと」<sup>25</sup>や「日本人と在日韓国・朝鮮人の本当の友好関係を築き上げること」<sup>26</sup>にあるとするならば、画像表象で構築された差異が、差別に該当しないことを読者に了解させる必要が生じる。なぜなら、もしそれができなければ、《マンガ嫌韓流》外部からの差別という批判に対して、作品中で取り結ばれた読者—主人公—作者という関係の総体が反論しえなくなるからである。《マンガ嫌韓流》の画像表象の特徴からすると、こうした機能を画像のみが果たすことは困難であり、台詞を中心に構成される言説が必然的に読者—主人公—作者からの「差別なるもの」の外部化を担うことになる。その過程は、以下にみるように、主に韓国人ないし在日朝鮮人の側への「差別なるもの」の位置付けと理解することができる。

韓国人については、ディベートの場面における「歴史的に朝鮮人は大中華を敬い自らは小中華を自負し島国（日本）の民を蔑視する」といった民族差別を行ってきました<sup>27</sup>、「朝鮮人は日本人を差別していたクセに」<sup>28</sup>といった発話や、「反日教育」に関連して「韓国人の心の根底には『日本人相手になら何をして構わない』という日本人差別の意識があるのね……」<sup>29</sup>といった例が挙げられる。在日朝鮮人に関しても、「在日特権」に関する話し合いの場面で、「しかしこの実態を見る限り本当に差別されているのは日本人の方ではないだろうか……」<sup>30</sup>といった台詞が発される。これらの台詞は、「差別なるもの」はむしろ他者＝韓国人・在日朝鮮人の方に内在し、自己＝読者の側にはないことを示しているといえよう。

一方で、「差別なるもの」が韓国人ないし在日朝鮮人にあまねく存在するわけではないことも作品中で示される。このことは、《マンガ嫌韓流》における在日朝鮮人キャラクターの役割に鑑みると、非常に重要な意味を持つ。というのも、在日朝鮮人キャラクターの意見を主人公らと一致

させることで、図20に示すように、《マンガ嫌韓流》外部からの批判を無力化できるからである。そのことを示すために、台詞において、主人公らと意見の対立するのは「一部の」在日朝鮮人であることが、「そして反日活動を行っている一部の在日の存在こそが 日本人と在日韓国・朝鮮人の関係を悪くしている！」<sup>31)</sup>といった形で強調されている。

その上で、在日朝鮮人キャラクターが意見の面で主人公らに同調し、「一部の」在日朝鮮人から主人公側へと立場を変化させる過程もストーリー中で描かれる。とりわけ、はじめは主人公と対立する主張を展開した「松本光一」は、作品を通じて最もドラスティックに立場を変化させた点でわかりやすい。『嫌韓流1』および『嫌韓流2』では、帰化した「金田安広」「安田英春」らが主人公側の主張（政治的権利や福祉は、「国民に固有」の権利である以上、在日朝鮮人側の要求は不合理）に同意するポジションにいるのに対し、松本は「またオレ達のような在日韓国朝鮮人は四世ともなると日本人とほとんど変わらないんだ！ だから地方参政権だけでも認められるべきだ！！」<sup>32)</sup>という様に、《マンガ嫌韓流》が批判する対象としての「在日朝鮮人を代弁する役割を与えられている。そして、『嫌韓流3』のクライマックスにおいて、既に主人公側の一員としてディベートに参加するようになった「松本光一」が、「ならばオレは帰化して逃げるのではなく、在日韓国人という立場で在日同胞が行い続ける悪事を止めさせる活動を行うことで『罪』を償っていきたいんだ！！」<sup>33)</sup>と主張する。

ここで重要なのは、主人公側への同調が、いわば個人の選択に委ねられている点である。松本の例のみならず、「一部の」在日朝鮮人に対して、作品中で「そして一部の在日達による捏造された歴史を基に権利を拡大している」とするやり方を 在日であるあなた方自らが何とかしていかなければならないわね<sup>34)</sup>と主人公らの一人が述べていることは、言説を通じて設けられた主張間の差異は、個人の意思によって乗り越え可能なものであることを示唆している。従って、図像表象が集団間の差異を普遍的なものとして呈示しているのに対し、言説の位相では差異化の力点が個人に置かれているということができよう。

ところで、図像表象と言説のそれぞれで差異化の対象が異なるとすると、読者はこの違いをどのように「読む」ことを求められているのだろうか。筆者は、作品中における在日朝鮮人キャラクターの位置が、この点に關して不可欠な役割を果たしていると考えられる。というのも、作品中の在日朝鮮人をめぐって、文字表象において日本人―在日朝鮮人の境界が明瞭に引かれている箇所があるからである。

『嫌韓流2』では、終始主人公側の意見に同調していた「金田安広」が、「厳密には（帰化した）僕はもう元



図20 『嫌韓流2』11頁

在日の日本人なんだが 在日韓国・朝鮮人の所業については共有しなければならないだろう」と発言しているほか、『嫌韓流3』で主人公側に属する主張を展開する「松本光一」が「ふむふむそうだな 彼ら（＝在日朝鮮人）は日本に対して謝らなければならないな…」と発言したのに対し、主人公の沖鮎葉が「お前もその一員だろ？」と返答している<sup>37</sup>。従って、文字表象においても、個人の選択として免れえない境界が存在することが暗示されているといえよう。

とすると、『マンガ嫌韓流』における図像表象と言説の関係は、図21のようにまとめられる。無名の他者＝韓国人ないし在日朝鮮人は、図像表象の構図と言説（「一部の」在日朝鮮人）によって、主人公らのみならず在日朝鮮人キャラクターからも隔絶される。同時に、図像表象の生物学的差異と言説における「全ての」在日朝鮮人という括りによって、主人公キャラクター（および読者＝主人公＝作者の関係）から在日朝鮮人キャラクターを隔てるのが可能になる。それゆえ読者は、在日朝鮮人が読者＝主人公＝作者の関係に参与しうる一方で、その関係の中にあつて異質な存在であること、言い換えれば限定つきで包摂可能な存在として「読み」を実践することを求められているのである<sup>38</sup>。

#### IV 《マンガ嫌韓流》の限界―「嫌韓のための嫌韓」の差異化をめぐる

ここまでの議論から、『マンガ嫌韓流』における図像表象と文字表象の境界設定の役割が明らかとなった。本章で更に検討を加えたいのは、在日朝鮮人の限定的な受け入れや「差別なるもの」の外部化を理由とした同作品の問題点ではなく、むしろこうした特徴に作品の成立基盤を揺るがしかねない側面があることである。このことは、以下にみるように、『マンガ嫌韓流』における読者＝主人公＝作者の関係を考える上で重要な意味を持っている。

前章で述べた文字表象の機能のうち、「差別なるもの」の外部化は、実は日本人の側に対しても行われていることは注目されてよい。典型的なのは、『嫌韓流3』において主人公らが学生時代のサークル部室を訪れる場面で、背後で後輩の日本人学生二人（うち一人には「荻野健一」とい

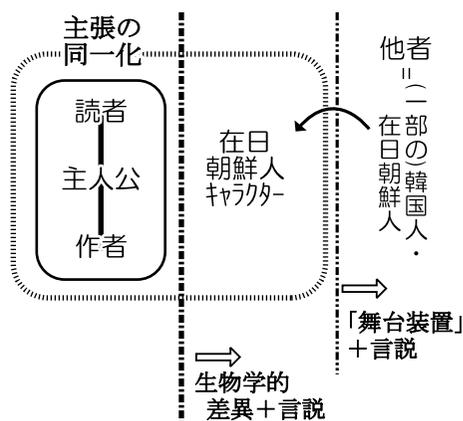


図21

う名前がつけられている)が「…(あ)れが在<sup>マ</sup>チヨ<sup>ン</sup>の先輩だろ? / 何で在<sup>マ</sup>チヨ<sup>ン</sup>がこのサークルの先輩なんだよ…」という密談が漏れ聞こえる様子が描かれたのち、在日朝鮮人キャラクターの「松本光一」に対し、彼らへの謝罪を求めて詰問する。その直後の場面において、主人公の日本人同士が、「さっきの後輩達には歴史を学ぶのは日韓友好のためという気持ちはないのだろうね」といったように、後輩らの言動が主人公らの望まざるものであることが発話される<sup>(41)</sup>。

作品中で主張される「日韓友好」や「差別反対」を《マンガ嫌韓流》外部からの批判への防御壁として機能させるためには、「在チヨ<sup>ン</sup>」という明らかな差別用語を用いる人物を読者―主人公―作者の関係から排除することは欠かせない。《マンガ嫌韓流》では、「荻野健一」らを「嫌韓」のための「嫌韓」というカテゴリーに入れ、主人公らとは異なる立場にすることが強調される。前章での議論と併せて考えると、図22に示すように、日本人の側の「差別なるもの」の外部化という手段も、《マンガ嫌韓流》外部からの差別という批判を回収するための戦略の一部といえる。

ところが、その後何の前触れもなく、アメリカでの公開討論会の話題が持ち上がったときに、「荻野健一」が突如主人公側の一員として登場する。そして、彼はそのまま韓国国学生とのディベートのシーンで主人公側として発言をしており、しかも図23の場面のように、謝罪を要求された「松本光一」と「荻野健一」が並んで描写され、「舞台装置」の面で両者は主人公らと同一化しているのである。ストーリー中で「荻野健一」が主人公らの位置に同調する過程、つまり、彼自身の主張の転換は描かれていないことからすると、図23のような構図には違和感を抱かざるをえない。

従って、言説による「一部の」日本人の外部化は、同作品において不完全であると言わざるをえない。もちろん、このことを《マンガ嫌韓流》の限界の一つと見ることは可能だろうが、しかし筆者は、「嫌韓のための嫌韓」を主人公らから切り離せないことが、作品中で形成された読者―主人公―作者の関係を

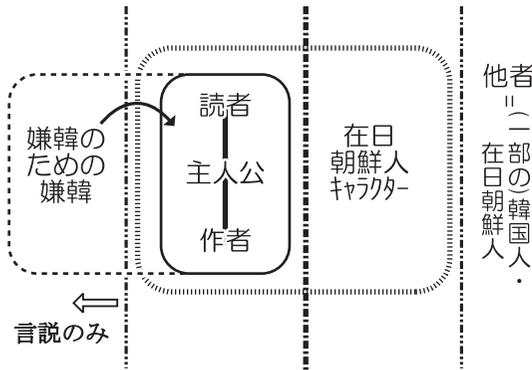


図22



図23 『嫌韓流3』211頁  
注)一番左が「荻野健一」。

瓦解させる可能性を内包していることにこそ、同作品の限界が存在すると考える。

作者は、『マンガ嫌韓流』でこうした差異化が不十分であったも、「あとがき」といったストーリー外のメタメッセージによって、同作品および主人公らの目的が「日韓友好」「差別反対」にあることを主張できる。仮にこのメタメッセージが字義通りに読まれるとすると、読者―主人公―作者の関係が作品中で「嫌韓のための嫌韓」を排除できないかわりに、メタメッセージがその役割を担うことで、日本人側の「差別なるもの」の外部化が担保される。しかし同時に、ストーリー外にストーリー内にはないメタメッセージ性を持たせ、しかもそれが文字のみで構成されていることは、マンガ表現の「禁じ手」に依拠していることを意味する<sup>43</sup>。作者の山野車輪氏は、インタビューで「漫画的技法に沿ったキャラ作りを指し」<sup>44</sup>ていると答えているが、ストーリーや作品の目的の根幹に関わる部分において、彼はマンガの「技法」からの逸脱を生じさせている可能性がある。また、作品外に何らかの意味付けを行う主体として作者という存在を置くと、作品中で構築された読者―主人公―作者の関係に揺らぎが生じることもなるだろう。

反対に、メタメッセージが字義通りでない意味として、つまり、ある意味反語的に読者に解釈されていると考えるとどうだろうか。このことは、図22の点線に示すように、「嫌韓のための嫌韓」を自己―読者と同一化させた「読み」の実践を意味している。そうすると、メタメッセージと実際のストーリーとの間に齟齬は生じないわけであるから、マンガの文法に絡む問題は回避できる。しかし同時に、「嫌韓のための嫌韓」の外部化は実質的に無意味なものとなり、それゆえ、読者―主人公―作者が一切の「差別なるもの」を排除した存在であるという前提が崩壊してしまう。仮に作者は別のメタメッセージによってこの状況を免れうるとしても、読者は『マンガ嫌韓流』外部からの差別という批判を封じ込める術を失う。

実際のところ、読者の立場から考えると、後者すなわちメタメッセージを字義通りに解さない「読み」の方が成立しやすいだろう。なぜなら、図21にあるように、「嫌韓のための嫌韓」は言説によってしか差異化されていない一方で、II章第一節で述べたように、図像表象の差異は言説の如何によらず設定されているものだからである。作者がどちらの「読み」を優勢にしようとしているかは断言できないが、『マンガ嫌韓流』のマンガ表現としての手法には、いったん成立させたはずの読者―主人公―作者の関係を、いずれの「読み」の方向についても脅かす可能性を持っているといえよう。

## V 結び―《マンガ嫌韓流》に対する批判の射程

本稿では、《マンガ嫌韓流》におけるマンガ表現の技法に焦点を当てて、図像表象と文字表象の関係性とその含意について検討してきた。本稿の分析から明らかになったことは、以下のようにまとめられよう。

まず、図像表象には次の二つの側面があることを指摘した。第一に、韓国人ないし在日朝鮮人は、役名の有無や主張にかかわらず、頬骨の突出という同質的かつ不変の生物学的差異を有する者として描かれている。第二に、構図といった図像表象は、読者に「恐怖」を感じさせ、むしろマイノリティとしての「読み」を成立させることで、自己＝読者と他者＝韓国人・在日朝鮮人との境界を設定する「舞台装置」として機能しているといえる。そして、これらの図像表象を通じて、読者―主人公―作者の水平的な関係が形成されることも述べた。

次に、言説に関しては、図像表象とは異なり、差異化の力点が個人に置かれていることが明らかとなった。ただし、差異化の方向性は図像と言説とで異なっているものの、在日朝鮮人キャラクターと主人公側には解消不可能な差異があることも、言説の位相で暗示されている。このことと図像表象における境界とによって、読者は主人公らと意見の一致する在日朝鮮人キャラクターを限定的に包摂可能な存在として理解しうる。

そして、文字表象による個人の差異化の機能は、日本人内部の「差別なるもの」を有する「嫌韓のための嫌韓」の外部的にも働いていることを示した。しかし、「嫌韓のための嫌韓」が突如として主人公側に包摂されていることから、この外部化は不完全なものといえる。ストーリー外のメタメッセージによって主人公らのポジションの明確化が図られているものの、それを字義通りに捉えた場合には、《マンガ嫌韓流》がマンガの「文法」を逸脱し、読者―主人公―作者の関係を揺るがすことにつながる。一方、字義通りに捉えなかった場合には、読者―主人公―作者の関係が、外部からの差別という批判に対抗しえなくなってしまうことになる。いずれにせよ、《マンガ嫌韓流》のマンガ表現上の手法は、成立させたはずの読者―主人公―作者の關係に問題を生じさせる点で、限界を抱えていることを指摘した。

以上の知見は、《マンガ嫌韓流》への対抗についてどのような示唆を与えているだろうか。もちろん、同作品の図像表象・文字表象の役割をふまえ、既存の批判の延長線上において、《マンガ嫌韓流》の意味内容の文脈―それ自身の有する差別という文脈―で更なる検討が必要であることは言を待たない。ただ、一部の批判にみられるような同作品への皮肉・揶揄といった姿勢は、批判する側と読者―主人公―作者の關係と

間にいたずらに境界を生み出し、《マンガ嫌韓流》の抱える限界を相対的に見えにくくする危険性を孕むことを認識すべきである。少なくとも、《マンガ嫌韓流》のマンガ表現は、読者の「読み」という点において極めて精緻なものであることを認め、それが批判の前提になければならない。

また、《マンガ嫌韓流》の特徴の一つとして挙げた読者—主人公—作者の水平的な関係は、情報化社会に特有のネットワーク形態であることにも注意すべきである。図24に示すように、同作品の画像表象・言説は、韓国人ないし在日朝鮮人の他者化のみならず、被差別部落出身者に対しても同様に機能している。<sup>46</sup>《マンガ嫌韓流》への批判は、オルタナティブな「日韓友好」の構築のためだけでなく、情報化社会における差別や人権のあり様を問うことにも結びつけられねばならない。

いずれにせよ、今後、《マンガ嫌韓流》のマンガ表現上の問題にとどまらず、植民地主義の諸理論や情報化社会の社会的ネットワークの特性などを視野に入れつつ、仮想空間・現実空間における「嫌韓ムーブメント」の全体像の解明に取り組む必要がある。今後の課題としたい。

注

- (1) 同会の設立経緯や活動趣旨については、<http://www.zaitokukai.com/> (二〇〇八年二月二〇日検索) を参照されたい。
- (2) 本稿では、山野車輪氏作の『マンガ嫌韓流2』『マンガ嫌韓流3』をまとめて『マンガ嫌韓流』と表記する。なお、個別の作品に言及する際は、『嫌韓流1』『嫌韓流2』『嫌韓流3』と表記する。
- (3) 黄盛彬「日韓『文化の政治』とその構造」、徐勝ほか編『韓流』のうち外「韓国文化力と東アジアの融合反応」御茶の水書房、二〇〇八、七五—九七頁。
- (4) 朴一・太田修編『マンガ嫌韓流のこころがデータメ』コモンズ、二〇〇六。
- (5) 田中宏・板垣竜太編『日韓新たな始まりのための20章』岩波書店、二〇〇七。
- (6) 「特集 現代日本のレイシズム」『前夜』一一号、一五—四十五頁。
- (7) 『嫌韓流2』の「第3話 在日特権の真相」において、通名の使用に起因する仮名での口座作成と脱税、公務員への就任、朝鮮学校や通学する子弟への補助金、固定資産税の減免、大学入試センター試験における外国語科目としての「韓国語」の設置などが「在日特権」として挙げられている。これらは、「在日の持つ様々な特権や優遇措置は集団の力を背景にした圧力によって獲得してきたものだ」(『嫌韓流2』、七九頁)と解説されている。
- (8) 板垣竜太「嫌韓流」の解剖ツール、前掲注5、二—一五頁。
- (9) 杉浦基「嫌韓流」は如何なる蒙を啓くのか? 『マンガ研究』十二号、二〇〇七年、二七頁。



図24 『嫌韓流3』158頁

- (10) 中西新太郎「マンガ表現から見た〈嫌韓流〉——キャラクター操作を通じてのレイシズム」前掲注5、一六一—二二頁。
- (11) 「韓国・朝鮮人だけに現れる特異な精神疾患。文化結合症候群のひとつ。仰鬱した感情を発散せず抑制した中で発症、躁鬱状態が繰り返される。胸が苦しくなり、火傷をしたような痛みと共に、呼吸混乱、消化不良、手足の痺れなどが主な症状」(『マンガ嫌韓流 公式ガイドブック』、晋遊社、二〇〇六、四六頁)とされる。なお、同書(四七頁)および『嫌韓流1』(三六頁)において、「全ての韓国人に精神疾患の傾向があるかのような偏見が助長されないことを祈る」という注意書きがある。
- (12) 「プロ市民」とは、主にインターネット上の掲示板等で用いられる表現であるが、「2典Plus」(<http://www.media-k.co.jp/iten/>、二〇〇八年二月二〇日検索)によれば、本来アマチュア的なものであるはずの市民活動を、生活の基盤としている人々を指す。概して「左翼」とラベリングされるような運動に携わる人々を、揶揄する目的で用いられることが一般的である。
- (13) 板垣竜太「嫌韓流」の解剖学 現代日本における人種主義—国民主義の構造」、前掲注3、九九—一二三頁。および、板垣、前掲注8。
- (14) 前掲注13、一〇五頁。
- (15) ①竹内オサム『マンガ表現学入門』筑摩書房、二〇〇五。②ヨコタ村上孝之「マンガとマンガ批評—理論と作品の関係の解体に向けて」宮原浩二郎・萩野昌弘編『マンガの社会学』世界思想社、二〇〇一、三四—六五頁。
- (16) 夏目房之介「マンガはなぜ面白いのか」NHK出版、一九九七、九一頁。
- (17) 伊藤は、キャラクターの成立には「人格」を持った「身体」の表象(伊藤剛『テヅカ・イズ・デッド—ひらかれたマンガ表現論へ』NTT出版、二〇〇五、九一頁)が必要であるという。モブ(群衆)の場面で登場する多数の人々は、キャラクターと呼べる要素は少ないものの、後述するように、その表象は集団間の境界設定と密接に関わっている。そこで、本稿では(一般のマンガ表現論では許容範囲を逸脱するかもしれないが)画像表象について両者をほぼ同等に扱う。
- (18) メンミ、A.(菊池昌実・白井成雄訳)『人種差別』法政大学出版局、一九九六。
- (19) 『マンガ嫌韓流 公式ガイドブック』でも、同じコマの「朴然守」の視線を「この鋭い目つきを見よ!蛇に睨まれた蛙のように動けなくなってしまうようだ。気の弱い日本人なら謝罪と補償をしまいかねない」(前掲注11、六八頁)と解説しており、恐怖を感じさせる装置として意図的に描かれていることが示唆されている。
- (20) 郭基煥『差別と抵抗の現象学—在日朝鮮人の〈経験〉を基点に』新泉社、二〇〇六。
- (21) 郭、前掲注20、一〇七頁。
- (22) 郭、前掲注20、一二九頁。
- (23) 小森陽一『思考のフロンティア レイシズム』岩波書店、二〇〇六。
- (24) 念のために付言しておく、キャラクターのシルエットを描くという技法は、韓国人ないし在日朝鮮人だけでなく、主人公側に対しても行われている。ただし、主人公側のシルエットは、髪型によってほぼ全て見分けることが可能である。また、図17の直後には「その嫌悪感はある『差別』とは分けて考えるべきではないだろうか?」という台詞があるが、II章第一節で述べたように、「差別」になりうるかどうかは、あくまでも支配や利益の正当化との結びつきに依拠しており、そもそも嫌悪感そのものを「差別」と同一視することはできない。
- (25) 『嫌韓流1』、二六〇頁。
- (26) 『嫌韓流3』、二三五頁。
- (27) 『嫌韓流1』、二二六頁。
- (28) 『嫌韓流1』、二二六頁。

- (29) 『嫌韓流2』、二〇頁。
- (30) 『嫌韓流2』、七九頁。
- (31) 『嫌韓流2』、一五頁。
- (32) 『嫌韓流1』、一八三頁。
- (33) 『嫌韓流3』、二三四頁。
- (34) 『嫌韓流2』、二二九頁。
- (35) 『嫌韓流2』、一六頁。
- (36) 『嫌韓流3』、二九頁。
- (37) 『嫌韓流3』、二九頁。
- (38) 在日朝鮮人の限定的な包摂ということに関しては、今後、植民地主義との関連から議論される必要があるだろう。植村が指摘するように、宗主国国民への一方的な同化と同時に、何らかの差異化を設けるところにこそ、植民地主義の本質があるからである。植村邦彦『「国民の人種化」と「脱人種化」』、『前夜』一一号、二〇〇七、七〇—七六頁。
- (39) 『嫌韓流3』、二〇頁。
- (40) 『嫌韓流3』、二五頁。
- (41) ただし、在日朝鮮人の場合と比較すると、「差別なるもの」に位置するのは（主人公らの考えからは逸脱した）個人としての日本人であり、個人の差異化のベクトルが両者の間で異なっていることに注意せねばならない。
- (42) 『嫌韓流3』、二六頁。
- (43) 念のために付言しておく、メタメッセージを用いること自体は一般のマンガ作品でもしばしば行われる。ただし、『マンガ嫌韓流』の場合、そうした他の作品群と異なり、読者—主人公—作者という関係を通じて作者と読者が一体化しているが故に、メタメッセージへの依拠が問題となるのである。
- (44) 前掲注11、一二頁。
- (45) 同時に、前掲注11で述べた「火病」に関する説明において、この性質が「二部の」韓国人・在日朝鮮人が有するものであるという言説も、字義通りの意味を有さないメタメッセージになりうる。
- (46) 図23のコマ外において、「大部分の方は無関係です」という注意書きがつけられているが、もちろんこれもストーリー外に設けられたメタメッセージである。